

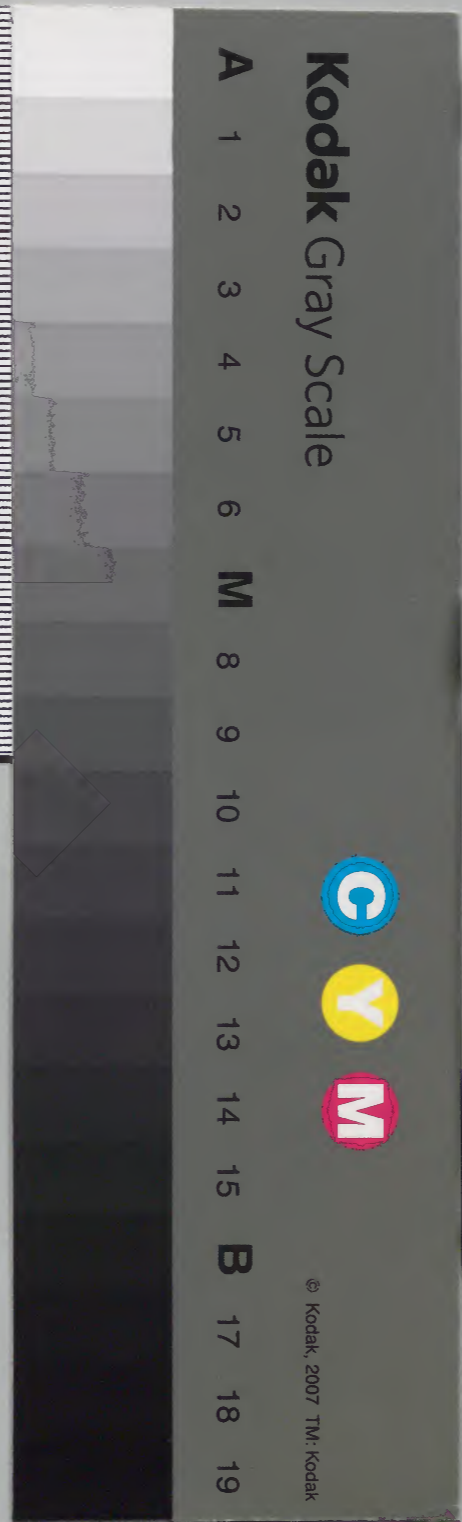
梅園叢書

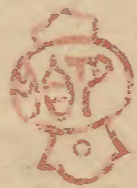
下

庫	文	閣	內
九		二七二八一	和
〇		冊	書
一	三	號	類
架			

(三才)

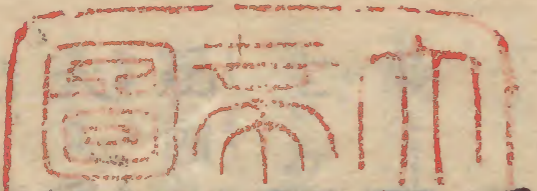
內閣文庫	
番號	和 27281
冊數	3 (3)
函號	190 183



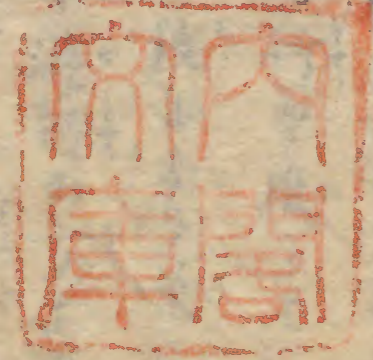


梅園叢書卷之下

目録



五行家の説害多し論
 人の所長を擇ぶ事
 吝嗇儉約の辨
 謙を守れとの説
 善人悪人盛衰夭壽の解
 陰惡必も禍を蒙るの説
 分別な者よけらよとの説



明治十二年時支

目次
 一
 一

一 忠臣國の爲に命を惜まざり身をやぢたりと語

一 醫に望聞問切の四ツありといふ説

一 醫ハ仁の術といふ論

一 美服珍膳世の弊を矯むの説

一 米は譬へて五倫の道を喻む

一 施し成りしを施しを受ふの心得

日記

梅園叢書卷之下

豊後 三浦晋安貞 著

五行家の説害多しといふ論

物として其弊ありざるをなれども、陰陽家の説尤人!

害ある事多し、その事ハハと陰陽五行を推して旺相

死囚勞の理を出むといへども、遂に枝より葉より

大に理に戻り事あり、四季に大將軍遊行の方ありて、

春ハ東夏ハ南秋ハ西冬ハ北を塞りしを諸事動作

はハ正月丑、二月辰、三月未、四月戌、五月子、六月卯、七

叢書下

月午、八月酉、九月亥、十月寅、十一月巳、十二月申の如き月
塞と、六十甲子、寅より午に至り、金神遊行の方より、日
を以ていへ、八子の日、子の方、丑の日、子の方をいひ、又方
は金神七殺の方あり、九坎、五貧、八貧、十死、歸亡、往亡、凶會
大禍、赤口、赤舌、狼藉、滅門、没日、滅日、黒日などいひて、多く
事を廢する事あり、成程、一通俗、よき事か、冠昏の如き
大事より、吉日をえり、むも、物より忌嫌
ふの心より、時を失ふ事、愚なるに似たり、諺も、陰陽師
の明は蓬たへどして、あかりはよく物をいぬ、草とる日と
ても、むくるとり侍ふよき日なりとて、悪事をなすまばあ

悪日なりとも、善事ならむ、目あり、試
べき事より、天火、地火の日なりとも、五穀を植て、よく培ひ
耘し、らんよ、よれ日と擇て、植培を耘らるより、八遙より
る、ア、り、又、麥の春の霜よりとも、稻の秋の風よりあきん、ハ、吉
日よりあきるとも、悪日より植るとも、かき、損る、ア、り、又、鴻
水火難等より逢んよ、吉日より建てる家も、悪日より建てる家も
かき、波よりゆるれ、又、一片の燼となるべし、武王以甲子
興紂、以甲子亡し、事あり、周の武王、殷をせぬ、甲子の日
はありて、殷紂王を亡し、同甲子なりとも、武王の為
よき吉日より、紂王のよき悪日なり、湊よ、あき、船の東

鼓書下

一ゆへに西風と順風といひ、東風を悪風といふ、又西一ゆへに
船の為らば、東風順すて、西風不便あり、是より風一順
逆はるく、吾ゆへに順逆あり、日一吉凶なり、我一吉凶あり、
よく悪き事をする日ハまべて悪日なり、よれ事をする
日ハまべて吉日なり、吉凶豈外一も、むべらんや、適日を擇
むして成就をさぐる事ある、手をうつて日時を急ぐ
ざる故なり、といひ、おのれ、左ある、吉日選でん、千ヶ千
成就まべそや、世の中の吉凶禍福ハ人間の常なり、た
とへば、糾る墨の如く、上よなるりの下よなり、下なるりの上よ
あり、變化定なるりのなり、たとへば、一握の糠をとりて水一

かかさん、先づちて流るるあり、後まて流るる有、風一ふり、
何れも吹くもあり、又先づちて流るる石一礙らるる
おのれ、後ちて先づちも有、おのれ、掌一入一同一掌
とちちれ、ちて、おのれ、ゆへ、處各同く、後、又一本の木なりとも、
一段ハ神を彫佛を造り、首をくく、つけ手を合し、人ハ貴き、
板ハ踏板、足駄の類となりて、人ハ踏色、木屑ハ薪とあり、
て、灰汁桶の苦ハあり、おのれ、生をうけ、おのれ、その用らるる
處ハ天壤也、よつて、おのれ、年月日時をうり、合せ、易の六十
四卦ハ配し、一代の吉凶をくく、覺束ちる事なり、且甚
引、害もり、おのれ、は、おのれ、生年、おのれ、女男、おのれ、事有、
三

續書下

左あると非又その外の年の人も早く夫は後妻は離れずい
はくぞや、是はその人の幸不幸あり全く年のしごとよありん
明の太祖天下を得たひてのち朕は年月日時を同じて生き
死んぬかひいり有へしと思召あみ強く尋給ひし一人を
め来たり見し所やせはくはる野夫なり汝何を業とせらば
と問ひしにハ蜜十三籠をやしなひて世をくらふ由入り
よ此の何事をもちとせとて放しけりなり或ハ畜を
しめ木をとり首途家移方を立日時を改め禁忌甚多し
東家之西、西家之東として東の家の西ハ西の家の東也
南は北と知り人も又その南は北の人のくめらる北也屋敷ハ

水難なるべし山潮など来せ月日の影正しくなり所をより
といふれどもあるの心ありしハ家退轉の基ありしハ婦を
婦徳正しく従順至孝ならば方ありしとも繁昌をべし
鳥のたぐ犬の咎、鮑泉やの物のおと、菌の生、燈のそらるるも
忌嫌ふ僻のふりてあつるを惱まるとも笑ふべし、孟嘗君が
いさむく吾命を鳥犬などにくけなばもあらん命を天
よりとらむとあつて彼等いんぞ人は禍をなすべし、口あるもの鳴羽
あつたのハさぶ人の物いひくさるる如し、禽獸ハより天地の
偏氣ありて無智のゆゑあり、夫は萬物の靈ありて天地と
並び立て、三才ともなるはどの人の無智の禽獸は教を

禽獸の下に立べきかたは六數代相傳の君譜代の
家來ははるべきがごとく皆理とありのをありきよりやれり
いふべし人の心は

人の所長と擇ぶたれ事
間際筆記の伴氏生質寡欲也尾山氏吝嗇なり相
交す事睦しある人伴氏より曰其元は尾山氏このむ處
同なり然る甚むつを何ぞや伴氏の曰尾山ハ才
藝我より劣るなり唯財は嗇しあるゆへ我この人と交す事
十餘年及ぶも渠は我より一錢を費さしめば是を
以て相善といへり人誠は長と所あり短とところ有る長

き所は交り短き所は交らば徳を得る事多るべし
歐陽永叔易の繫辭を以て孔子の書とせん文中子とるべ
しとて、韓魏公これと相とるが、此事をありて終は
話あり及ぶなり、永叔もふく韓魏公の徳は服して、
百歐陽修を累ぬとも何ぞあへて韓公を望まんといふ朋友
の道義はかいて忠は告正をべき事あり、勢はなす事
あり、能々工夫あるべし、ひとり朋をとるの事なす君の臣を
はるもあつたり、人の才同くは、國の政をあるべき才あり、
敵をきり旗を奪ひ城をのり山を碎くの才あり、國の財
を量り用をとるの才あり、他國へ使し君命を辱むる

才あり、よく君をいさめ人を規むる才あり、その品すましくなり、
たとい是等の才ありても、その場くは使えねば、吾存分の働
なり、ぐく、大工の木を造り、ぐく、木を集め、
ぐく、とも、梁とあるべし、木を柱と、柱とあるべし、木を棟
たぐく、用み、を立す、ぐく、漢の高祖を名君といひ、能々
ぐく、人の能を見、張良を師と、蕭何を相と、
韓信を將とせ、故あり、韓信を師と、張良を先
鋒とあり、蕭何を行入人、あんど、たとい、ちをさ
ぐく、その驗、ぐく、近頃、片桐石見守、茶人のそこへ
あり、ぐく、烟草の火入、唐金のぐく、物、ぐく、いう、も、や、

き器也、人なるよれ、香爐なり、と云れども、石州そのあり、
て、閣を、河、人、その子細をと、石州の曰、是火入と、色、
上品なり、香爐と、ね、下品也、と、誠、この心を、り、
人を、り、人、人、一盃の器量、を、
も、なる、

吝嗇儉約の辨

吝嗇ハ、ち、也、儉約ハ、始末なり、ち、事、の、く、心得、
らん、僻事なり、その跡、似、
らん、夫、財寶ハ、限、ある、の、く、望ハ、窮、ち、物、あり、限、財
を、以て、窮、ち、望、を、遂、んと、
日、日に、萬金、を、費、し、天

下をあげてその用をあたるとも、はる事有べし、入をせりて
出、財を節し、用をほりむ、天の道あり、おそれ、財をお
しむ、始末ハ財を節は、節ハ、字より、竹、節有
とく、よれた程々にて止る事あり、あはれたハ多く財を貯えと也
始末ハ用る所あるが為也、孔子、夏禹王を謂く、菲飲食而
致孝於鬼神、惡衣服而致美乎黻冕、卑宮室而盡力乎溝
洫と、平日吾口體を養ふの菲きは、鬼神は亨祀する者ハ
豊に潔せんとなり、常の衣服を文ざりハ、祭の衣冠を鮮よせ
ん為なり、吾抑、家を卑ふも、ハ井手溝塘を、をいとな
まんとなり、是ハかゝるとき君の教、下もその分々相守ぶと

事なり、青砥左衛門夜に入て出仕し、るよ、は、は、燧袋
入てり、るる、錢を、十文誤て滑川へや、り、る、と、其邊の人
家一人走り、錢五拾文出して炬十把、い、是をと、り、して
終、十文の錢を、り、め、り、る、て、云、る、ハ、十文の錢ハ、只今
覓、び、長、く、水、底、よ、あ、づ、て、失、べ、し、五拾文の錢ハ、商人の
手、よ、あり、て、う、せ、ば、彼、よ、あ、る、と、吾、よ、在、と、何、の、差、別、う、あ、る、へ、と、
う、れ、是、六、十、文、の、錢、を、う、り、な、さ、し、ど、豈、天、下、の、利、を、ら、ん、や、と、云
り、と、り、也、是、吝、嗇、なる、人、の、ま、ご、事、よ、あ、り、ば、東、坡、李、公、擇
と、與、る、書、ハ、口、腹、之、欲、何、窮、之、有、毎、加、節、儉、惜、福、延、壽、之、道
と、い、ふ、誠、よ、い、ろ、ハ、性、を、ま、る、の、茶、味、ハ、腸、を、と、ろ、か、け、の、藥、なり、
八。

禁書下

富貴の家をくく、情慾味りしむる、随ひて有ゆ、一時心を
をくく、口を爽く、悦て、身の勞るをく、中
壽をく、人ハく、山野の人ハ求べき貯も、日日東
は、西は、慾と味も、故は多く、壽
ト是東坡が惜福延壽と、所あり、今海内久しく太
平の化は、奢侈の風、日日、謹んで古を
おひ、武田信玄の制詞は、妻子之衣類、壹万石所持之
士者、京染等の小袖、五千石より、下ハ薄板、五百石より
下ハ紬、百石の内、外ハ布子、くべき事、又い、親族の間、
と、内振廻の義、二度、二汁三菜之外、可停止事、又三

好筑前守義長志を得てのち、妻の衣帯を京より、
て、一曰、表ハ無紋の綾、二曰、表ハ國紬の長濱
染、裏ハ示太山絹、三曰、裏紬の小袖、兩面無紋の黒附、
紅梅の帯五條と云云、二百年、く、て、その風を、
くの、近來、酒店遊里次第、ひろく、農を、
ハ少く、その人膏烟草を、無用のもの、世に、是
國家の貧し、慶長十四年
東照宮うつて、烟草を禁、深く益なき事を察、
かいて、

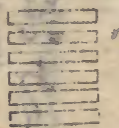
謙を守れとの説

後書下

易の謙の卦、艮の卦を下り、坤の卦を上り、
地なり、艮ハ山なり、山の地のうへは高く出さる、時として驕
崩すことあり、山地の下より下れてその高さを示し、坤ハ
順りて、艮ハ止るなり、物に順ひて居るべし、所りて進むと
を止めぬが、止るは人のまじひ、姑もなり、是謙の徳也
謙を辱りてさうとす、字より物に高ぶるは、吾を誇りて、奢
ざるなり、故に易の彖傳に、天道虧盈而益謙、地道變盈
而流謙、鬼神害盈而福謙、人道惡盈而好謙、仰て天を
見れば、日高く昇れば、月正に満ち、虧めて地を
觀せば、潮も満ち、水も流れて卑し、鬼神造化

のあとも、草木繁りて、枯き、人盛りて、おとろふ、人情も奢
恣あるの、さうとす、辱りてさうとす、恭しきを、愛も、甲斐の
信玄、板垣彌次郎が扇に、
誰もこよふつきハやがてくる月の

いとよひの空や人の世は由

ところの歌をうきて、賜へ、謙徳を誇りめとあるべし、人の
至て貴き、天子あり、さねども九五の位は、易の乾
の卦、、下より下れて五より上り、是九五なり、是猶上に
一爻をのり、天の道をおそれ、はげしむるなり、故に易
の上爻ハ亢龍有悔と、龍の天よのほるがごとく、盡くの

發書下

十

ぼりはめぐる時、下らぬが適ハぬ也、始て悔く成と
是天子のこの事をいふはあはれなり、たえても也、一升
入る器あり、一斗入器あり、一石入器あり、一斗入器あり、九
合いき、一斗入器あり、九升いきて、抑く時ハ氣遣なり、一升入
器あり、一斗入器あり、一斗入器あり、障ても打お
ほして、剥罷る損がはなり、ありゆくその也、抑てや一升
入るは二升もいせんともうるとや、易の象ハ、亢龍有悔、盈
不可久也といひ、足利鹿苑院義満ハ、太上天皇とまで
なり、譽る人ハあり、秦の李斯といひ、一人ハ上蔡と云所
の人ありて、博學ありて多才なり、秦の始皇は之、位宰

相となきり、されども、その心あく、ほて抑をり、そののよて、書籍
あはれ人、いろいろの事をありて、上の志抑をり、その物なりとて、
天下の書をあつめて焼きて、儒者をあはれ坑にひきり、め殺し、
始皇崩して、その太子扶蘇と、大将蒙恬などを殺して、扶蘇の弟
胡亥を位につけ、二世皇帝と號し、民富ハ謀反をまゐりて、成敗を
いふ年貢はよく取立、督責の術として、民をなやましめ、右よりよく
うちて、はうく習せれば、又趙高といひ、その讒はあはれ、咸陽の
市にて、はうれり、その子にむく、故郷の上蔡ありて、犬
をひき、鬼のや、貧しむり、をなやしめ、そのうど、夫とへ
うらみ、奴身となり、一門従類ことごとく、ころされり、李斯忠を

君ははる一民を憐れ、世を治くまばらの後悔はあさまし
是らも湯の穴龍のいほりめをあらざる也人々その已が分と
事をせむば悔なり、子ハ子の分あり、臣ハ臣の分あり、たゞ天
下は並なき忠をほく、孝をほく、是臣となり子
にもその分あり、吾こそ世もよく治く忠孝をなす
しうとて、それを鼻よかけ、親よわらぬ、君よわらぬハ謙の道
はたぐひ、忠臣孝子とふべし、孔子謙の心を釋て、勞而不
伐有功而不徳、厚之至也とのなり、手柄ありても、身は勞
して、我こそと人はわらぬの心なきんこそ徳のあつたまれ、分
分をあらざるより、賤くして高より、貧くして富を學び、一

段づも吾わらざるより、木綿布子も羨し、綾羅錦繡も
きほく、夫より綾羅錦繡もより、歩行も
袖もより、夫より綾羅錦繡もより、歩行も
る時ハ馬も羨し、馬よの色ハ駕籠、々々より乗物真し
只音ハ高大よむる事、是を階上とて、約體あくとも
いふ、敷布子きるべきりのハ布子、歩行もべきりのハつ
もうち、分限の外をあらざるべし、高席ははる、勿
体ありて、よきもの様も、親よりも一段上座にた
ハ片腹のくこと有べし、謙の道をあらざる者
り怒るより、やむるハ八伯ハ天子の樂まるを、季氏もい

後書下

うりとも孔子うく歎きたまひしもその分をあらうる故
家は貯ふべき道具も我分限より過たらんハ却て耻べ
事なり、唐の文宗のよれの相國王涯が娘寶訓といひ
人の妻となりてはくぐりて父いひりて玉の釵のきりめ
て細工手をほくせり、價七十万錢なりといひり、王
涯きりて七十万錢ハ我一月の俸金なり、汝は押むよハ
よし孫ども、釵りりりて七十万とて、バ、それ妖物なり、
ら、禍と相隨んといふ、數月の後女又之りて、員外郎馮球
といひり、妻りめりりりりりり、王涯きりて、とづるは郎吏
の妻りりて、首の飾七十万なり、バ、久くあるべし、ハ、

は、程なくその身も亡り、頼家のよれ、山門一揆をお
めりり、佐々木左衛門太郎重綱も討手こむひりり、父
高綱法師をせりり、重綱が武具の美しきを見て涙を
流し、高綱の兄入道經高入道盛綱そのよれをいひり、
武具の美なる身は害あり、れ兵をあら、此度生てり、
ら、いひり、は、討死しりり、討死ハ、より、武士の本
意ハ、いひり、武具の美なる早く人の目もほりり、
一、頼義もろり、れを亡瑞の鎧とて、いりり、めり、

善人悪人盛衰大謝の解

ある人問て曰、治はる世ハ、乱はる世ハ、多く悪人ハ、多

くまへ善人ハ抑らるへ、悪人ハ富、善人ハ貧しく、悪人ハ壽く、善
人ハ夫きうと死ハ如何予まゝて曰是説あり、善ハ陽の正し
き也、悪ハ陰の邪氣なり、陰陽ハ互に消長もつものなり、
夏より冬きまり、夜翌日晏うるがごとし、然どもあき事と
耳よりて心よさうと信、目よ見て心を悦し、人の君とる
ものも、うしく防ぎ守るの心やうれば、佞人まきとひ進むもの
なり、佞人まきめハ親子夫婦の中をへどて、兄弟君臣の怨
をせは、是も、その階なり、佞人ハ計を廻し、をつひをお
し、つうして君の心よ適ハんとくむものなり、現在悪
人とハくへぬものなり、操狂言はもつとく、悪人なり、を面

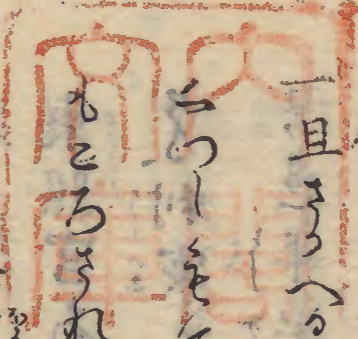
あく眼ふとく、うらをあも方外なる事を聲あり、けよさけび
てり、物なむ、誰うこれよ迷ふべし、悪人ハ智ふく詞あり、
ては、そその氣をたへぬものなり、酒をのこ色をらのむがと
き、人間の至てたのく面白きもの、是よ過うるものなり、たと
へハかくのそと終よ身の讎となるを、後よぞ押りひ合もつもの
なり、いふある發明の人も、うよ迷ふるを、むり、楚の平
王の臣郤宛といふ人あり、正しき人よて、國人もあつたり、
り、時よ呉の國より、掩餘燭庸などいふを、大将とて楚を
せめり、呉の國內亂ありて、君ろろ、ねらるゆへ、掩餘燭
庸も皆よの國よ出奔し、此よた郤宛楚の大将とて

後書下

拒き戦ふ、此亂をさして人の亂に乗るハ不祥なりとて、真
師を引入り、平王の出頭は費無極とありの有、卻死を
ら、時の令尹子常はゆきていひけるは、卻死何ぞ令尹を招
き酒をさめ度由念頃申はと云、又卻死がく行て令
尹の宅へきり酒をのまんとなりといひけり、卻死悦び、
賤し我宅へ令尹来らるへと事身の面目此より、
ら何ぞ饗應の志なきといひけるを、費無極きて、令尹武
具を甚るのめり、り来らる日ハ武具を門はけり、
尹きくくバらるべし、時は是をとめて獻せられといひ、
其日は成らば卻死の如くとも志つて待て、無極

いと令尹はゆき色を變へ、某君を誤んとせ、卻死
が門は武具森然と立ち、是二心の色と見へ、先達
て吳の軍も、吳の賄をうけて一軍も及ばず、
疑給く人を使ひて見ぬと云らる、人を使ひてさしむ、太
刀鋒は箭無極と云は違なく、福あり、令尹大に怒
焼討りて卻死をる、慶長の頃大閤秀吉薨
給ひ人さるも静なり、時、五大老ありといへとも、
東照宮と加賀利家卿の右に出るものなり、石田三成、増田長
盛とありて、この兩人心をあせぬ、吾輩志を得る事あり
べし、石田増田中より、真似して、増田ハ

顧命もさむきぬふあはばやととめめいりるへ増田は
うきもむねくかりたりよしく姦人の心はうきものあり
かくのまゝ手を入あを入さるわどれいあある人をも迷し
一旦さへるものぢねども夕立の漲り来るとく岸も堤も
うつしもてゆく様ぢねども只一時のことうして費無極
もころぢね増田石田もわらびう又正しき人ハ物ハ屋
つとむ此方うりてめて立どころは富貴を得るといふど
もさば計をまりけて我身の快まる事をせば晴もあけ
らどあしきとさいめうわとあき人の様ハ俄ハ炎のも一
出る様の事ハ物ハ隣ふく利もふりて貧りのなり又



よき人ハいつ迫いきても人は愛せられぬゆへ長いき
ても猶抑まうかりあき人ハ四十をうして死て
も人ようともあき果られ長生きとく抑もはるあき廿日
日のてうて一日とも抑もはる三日雨の降る六十日
ありうき心地まるが如し百年の歡樂は短うたよ似て
一日の憂ハ長よ似て一斗の水ハ握の泥を握るを
の水おとくく泥の如し百人のうら五人七人の溢るの
あき六のうきハあきとく溢るの様ハ抑もはるあきよ
たもあきも命ハうき有りあきねばよき人よてながいき
あきうもあきあき人よて早く死てあきあきあき

後書下

も一度も一度衰る内善を修む家より悪を修む家
ハヤカ事多ク、何の里何の國ありとも鑑てあるべし
人の曰此理の如く、又ありた事ハキクヤムよれた事ハ
きくもいふ予が曰酒ハ口よりあぐりて病をうり
色ハ心ハ快し人をつも朝寝する人ハ左ハ朝寝する
とてやういふ忠告れど、病をうり入る事とやう
そのなりより、福ともしハ諍也、それどねれた時ハ
きかのもういふ事ハ、事ハ耳より入る事とお
て大事の事とてやういふ工夫ハ入る事とお
もべし、旁觀ハ目とて、是を隣の息の事とていふ

いろは罵なる人とも早くやうと云う忠と思べし

陰惡必も禍を蒙るの說

憎ても憎むべき者ハなき事を造りて、人ハ惡名をと
まらぬの毒飼して人をころをその我ハ賢人のよりて
ひそし人を陥し入る、又人をバ毒飼し已ハ長く世ハ
生さる、榮耀ハ旨き事ハ逢んとハさり、連ハ黒き
心さなり、これよりえねバ、或ハさり、或ハ討も
のり、その心ハ害なり、然とも天ハたつき居て卑を
その事顯るの禍を蒙るハなり、その罪牛裂
也

分別ちと者よおぢよとの説

太閤秀吉御咄のりの伴内とらふの有ある夜話の時、世の中何物が至ておぢをりきせと問ひひらるる、皆上様などおぢをりきせなりと云、伴内きいて、いやく上様ハ正直くましくて、身は過るなきバ氣遣なり、世の中は無分別者などおぢをりきせものハけりば、無分別者ハ物の聞えけなく、用捨をまじく、我儘をもちて、理非の辨なきれバ何う渠が氣よあつり、いふ成事をいひやぶり、思ひかゝる難をやなりと云、はきハ太閤悦ひ感へかりとなり、誠は世の中は理非のことうちあつぬもの程おぢをりきせはあつじ、物ハ理よよりて服もる

様はありてこそその分もあき、百姓の水論はらるるをきく、いひこの男何やういひて、此事が目まはうららるる、目ハ何の為のりなるやといひはき、我目ハ面の文なりと、もろも負る色あつ、くいとん、肝心の理いんとも、瓢單まで鯨おとゆる類なるべし、人食犬の様なるりつなきバ、僻事いんとも除て通志ト

忠臣國の為に命を惜まざる身をやばんとす話

趙の國の臣、廉頗、藺相如と二人の臣あり、廉頗ハ手だよき大將にて、志むく戦數うつ、そのち秦の國あり、わろく、趙とともん、此二人ありて、

因て趙王は約して、澠池とらふ處に、秦王會しうれしう、
酒酣して秦王趙王とひて琴を奏らふ、趙王琴をひくれ
るとき、秦の御史前んで、その年月その日、趙王よことをひら
くむと書とめたる相如をとりて、秦王よとめうてと云
らふ、秦王いふるては、相如進て瓦をとり跪き、君より瓦を
撃ぎんば、五歩の内頸の血を以て大王をけつべしと、左右の
もの相如をおろさんといふを、相如目を張して叱りければ、恐ま
てあつとあつとらう、秦王是非なく瓦をうつ、相如趙の御史をめし、
その年月日、秦王よ瓦を撃くむと書せたり、秦の羣臣、趙の城
十五を秦よ獻せよといひければ、相如秦の都咸陽を以て趙よ

獻せよと、始終酒宴おもしろめで、一分の辱まうけつて國よくへ
りらふ、この功よより、その位廉頗が上より出り、廉頗憤り、我
軍の功を以て、彼が口うたの功名の下よんことを安く候、相
如よあつとかりふらふは、耻をあらふべしといひらうと、相如
て廉頗出る日、病と稱し出づ、ある日途よて廉頗う来るを
見て、車をくして避匿り、相如が臣等無念よやい、吾等親
よられ妻子をきて君よはらゆら、君の人とならうをあらひてあり
然らば廉頗よくはで雑言き、わら恐る事くくのそ、常式の
ものよともうら、耻辱ハ蒙らば、吾等りより身不肖よいへば、
いふを賜りらふべしと云らふ、相如よめて、汝等、廉頗と

叢書下

秦王ハいふは云らる、是ハ秦王勝せりと云、その時
相如、秦王の威あるを我是を辱し、是は怯しと云ふも
一人の廉頗、恐るるはあはれ、秦我趙を攻むるのハ我
に廉頗と二人あるを以てなり、二人あはれを一人ハ傷ト
然らハ國の為らあはれ、國の急難をまて、私の恨を快せんハ
忠臣はあはれと云らる、廉頗是を聞大ニ身をこひ、相如
家はゆき、涙を流し、罪を謝し、是より刎頭の交をなす
趙の國や、やうなり、朱雀院の馭宇、あやき星出り、
天文博士是ハ大将の家の禍なりと勘ぐる、時ニ
小野宮實頼右大将、枇杷仲平左大将、小野宮

右大将の家ニは是を讓ふとて、祈禱の志あり、はくされ、
枇杷左大将の家ニハ何事もなり、人其子細を問はば
左大将、星り、禍を大将の家ニ降さば、我と實頼とを吾
己ニ年老身不肖なり、實頼年壯ニ才あり、我ハ禍を免
る事あり、實頼ニ利あり、我皇家の為ニこの人をお
しむ、故ニ讓ぶとて、北は、蘭相如ハ國の命を命を
是ハ國の為ニ身をおし、君ハ忠ある所ハ一也、
醫ニ望聞問切の四ツあり、と説
今人病をうけ、醫師を招ぐ、明ある處ニゆ、委しく病の
始末をし、脈を察し、むべし、病人多くハ、病

禁書下

ハ醫道の罪はあつた、醫を學ぶの過は、故に醫ハ仁の術といふべし、醫者ハ仁の術を施者といふべし、仁ありて人ありて、吾萬人治して萬人を活し、仁なきも、我ハあつた、死にき人なり、十人治して十人死し、吾も、醫者の罪はあつた、

美服珍膳世の弊を矯るの説

人激も事あはれ、吾衣食の為は温飽の為なり、是はあつた、男子の志は、事や事、事あり、枕して馴ぬ旅寐の波はゆるる、商賈暑きより寒きといふ、春より秋を凌ぎ、田は耕し、畠は耘し、徒は歩み、馬は跨り、刀をよこし、墨のころも、世を背ふがときも、十

七八衣食より人なり、故に金よりそのハ利根の、と時めく、貧しきりのハ、誠は色は酒、博奕放埒は家をやろ、あはれハ、邪慾不道は富も、あり、貧福貴賤は、人の賢愚ハ、又衣服、著るざりて、人ハ、心あり、楚楚ちんハ人、耻の心あり、人と交るも、膳は美味を羅、酒は歡を、容易あり、やきを關は、衣服の美惡ハ、心なり、又ハ、吾友なり、郷應の心は、麥を煮て、心のゆく底も、誠の友なる

心を逍遙院の歌よ

中... 海... 王... 麻... 了... 了... 了...

心のはりよまげりよまぎい

しよ給へ王人もおるト人... 習ふ處の道より

いほとまぐその心まておる... 今佛者

ハ儒を亦なりとハ儒を佛を誕なりとおもひ佛氏も宗派を

しそ心をも事同くは需者も門戸をそそ道をも事

同くはおのくその道よりの其道は押めて發明をひし

この事のもなり盗人となり遊俠となりあひはくめり

あひはるるいひあひは人をあひまきつたりその品つりて

父と母とありて生もさる人ハなり已は天をりき地をぬ

父と母とありて生もさるよりしてこれハ父母兄弟則天倫と

よりのよてこの外は道なりと志るべし親と子とあるがゆへ

君と臣との禮あり兄と弟とあるがゆへ朋友の交あり天を

いづき地をぬむゆへ夫婦の道ありたといひ我いとなしハ

士となり農となり商人職人ともなるも此外は出べし

是より工夫をるときは道おのほりあきうりなれん酒も

あは酢もあは米の米なる處を志るべし米ハよく人の命

よのべ人を申さひ害なきりのあり酒となり酢となりてハ

装書下

一時の味をきしむまでも、本来の米は及ぶ、人も人の道は
八君君より、臣臣より、父父より、子子より、夫夫より、婦婦
との間はあり、是本来の人の性なり、よく考べ、又その
我らのむ恵よりて物をさる事も、米の酢酒と變じらざる如
し、是を好む處は、中も福も、たて、いん、月、ハ、ゆる、く
大空よも、む、その、ぢれ、も、船、も、う、る、屋、て、ハ、氷、上、の、月、と、林、下
よ、中、も、ひ、て、ハ、木、間、の、月、と、い、ひ、池、は、臨、ハ、その、影、池、は、あり、露
を、弄、ハ、その、光、つ、ゆ、よ、と、ほ、る、が、ら、い、ある、人、五、倫、の、道、を、人、よ
よ、きて、兄、ハ、弟、を、いと、抑、ミ、弟、ハ、兄、を、り、や、ま、へ、と、抑、へ、ら、よ、弟
きて、お、と、き、く、ら、く、兄、と、ん、人、ハ、弟、を、ハ、いと、抑、む、と、の、よ、そ、い

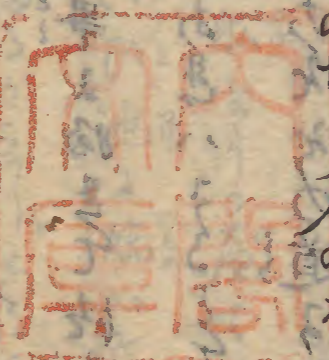
とて、我、勝、手、よ、き、事、の、と、き、覺、ら、よ、又、子、路、ハ、百、里、の、外、ハ、米
を、抑、ひ、父、母、を、養、一、事、を、く、り、ら、ハ、子、路、ハ、その、外、健、な、ら、
男、よ、て、こ、を、有、ら、め、と、云、ら、よ、又、ある、人、の、と、ら、よ、よ、抑、ひ、と、の
あ、ら、て、ぢ、れ、を、妻、の、あ、ら、て、事、よ、ゆ、ま、て、は、ま、を、き、よ、い、など、こ
び、ら、よ、聖、人、の、教、も、妬、あ、ま、バ、さ、ら、と、て、さ、り、ら、よ、誠、ハ、婦、ハ
物、ハ、あ、ら、そ、ら、は、妬、と、ん、あ、ら、と、の、道、も、う、ら、ひ、る、ん、さ、
て、の、事、も、う、ら、ん、ふ、罵、に、さ、ら、め、ら、よ、妻、な、ど、あ、ら、ら、よ、道
ぢ、妬、ん、ハ、み、く、い、べ、い、さ、あ、き、ハ、我、存、分、の、僻、事、を、さ、ら、よ、きて、
婦、人、ハ、聖、人、の、道、を、の、ぢ、ぬ、ん、も、時、宜、よ、ら、り、て、ハ、抑、な、げ、る、ハ
是、等、ハ、酢、酒、を、一、は、ち、と、米、と、見、露、ハ、や、ら、溝、ハ、ま、む、う、げ、を、月

叢書下



梅園叢書卷之下

とわふ類^{たぐひ}ありて、うが心のこころにひくれ、我^{われ}あつちを公^{こう}よせと
過^{あやまち}なり、うが私^{わたくし}心^{こころ}よあつたとい、聖^{せい}人の^{ひと}いふ^いま^まが^が城^{しろ}ま^まく^くとも、我^{われ}
うごくをなまの媒^{まへ}りる^り海^{うみ}、
施^{ほどこ}しを^をか^かま^まし^しと^と受^うけ^けの^の心^{こころ}得^え
施^{ほどこ}してハ、いふ^いま^まが^が城^{しろ}ま^まく^くとも、我^{われ}
とわふ類^{たぐひ}ありて、うが心のこころにひくれ、我^{われ}あつちを公^{こう}よせと
過^{あやまち}なり、うが私^{わたくし}心^{こころ}よあつたとい、聖^{せい}人の^{ひと}いふ^いま^まが^が城^{しろ}ま^まく^くとも、我^{われ}
うごくをなまの媒^{まへ}りる^り海^{うみ}、
施^{ほどこ}しを^をか^かま^まし^しと^と受^うけ^けの^の心^{こころ}得^え



三都

書物

發行

- 江戸日本橋通二丁目 須原屋茂兵衛
- 同 日本橋通二丁目 山城屋佐兵衛
- 同 芝神明前 岡田屋嘉七
- 同 和泉屋吉兵衛
- 同 淺草茅町三丁目 須原屋伊八
- 同 横山町三丁目 和泉屋金右衛門
- 同 下谷御成道 紙屋徳八
- 京都三條通柳馬場東入 若山屋茂助
- 大坂心齋橋通安堂寺町 秋田屋太右衛門

